2024年度 大学入学共通テスト 世界史Bの分析

世界史

学校法人 河合塾 世界史講師　井上 徳子

1 はじめに

2024年度世界史Bの平均点は60.28点で、昨年の58.43点から1.85点上がった（2022年度が65.83点、2021年度第1日程が63.49点）。世界史Bの受験者数は75,866人で、地理・歴史科の中でもっとも少なかった。

2 概略

分量：大問4題、小問33問は、2021年度に共通テストになってから2023年度までの大問5題、小問34問から減少したが、分量の大きな変化はなく、問題のページ数（白紙を除く）は昨年と同じ32ページであった。

時代：前近代史からの出題が多いが、第二次世界大戦後からの出題が昨年より増加し、第二次世界大戦後を中心とする小問は3問であった。選択肢の一部に第二次世界大戦後の内容を含む問題も2問あったが、いずれもグラフの読み取り問題で、世界史の知識そのものは不要であった。

地域・分野：欧米史がアジア・アフリカ史より多く、アジア・アフリカ史では中国史からの出題がめだった。一方で、東南アジア諸国、オセアニア、ラテンアメリカ、サハラ以南のアフリカからの出題はなかった。分野は例年通り政治史中心だが、文化史も昨年同様多かった。

形式：大問4題中3題、計7か所で文字史料が利用されており、文字史料がない1題では図版が利用されていた（ただし、読み取りの必要なし）。会話文は大問4題中2題、計4か所で、昨年の5題すべて計10か所から激減した。問題を解く上での煩雑さが少し軽減したとはいえ、資料（文字史料・グラフ・地図）や会話文など複数の材料から必要な情報を読み取り、習得している知識と結びつけながら総合的に判断する問題が多いことに変わりはなく、注意深く解答することが必要である。なお、本試験で初めて連動式の問題が出題された（ 13 ・ 14 ）。

3 正答率が低かった問題

本年の出来不出来は大学入試センター公表『令和6年度試験情報データ』に基づく。その結果は河合塾が集めたデータとほぼ一致するため、誤答のパターンは河合塾が集めたデータに基づく。

■例題1　2024年度 共通テスト本試：第4問 問9 33

福村さんは授業の後に、世界史で学んだことを踏まえてメモ1・2を作成した。前の文章を参考にしつつ、メモ1・2の正誤について述べた文として最も適当なものを、後の①～④のうちから一つ選べ。 33

メモ1
書道文化へ積極的に関与した乾隆帝は、漢人に対して自由な言論活動を認め、中国の伝統文化を保護した。

メモ2
清の皇帝による中国の伝統文化に対する政策は、北魏の孝文帝により自文化を維持しつつ進められた漢化政策に通じる。

① メモ1のみ正しい。　② メモ2のみ正しい。
③ 二つとも正しい。　④ 二つとも誤っている。

これは正答率が一番低かった問題で、河合塾のデータでは、受験生全体だけでなく、現役生・高卒生、上位生・下位生すべてで正答率が一番低い問題だった。現役生は解答が分散しており、①～④のマーク率はほぼ4等分だった。下位層では正解④の選択者が一番少なく、①の選択者がその3倍以上おり、③の選択者も25％以上いたことから、メモ1を正しいと判断した受験生が非常に多かったことがわかる。先生の最後の発言「乾隆帝は自らも書を嗜み、数多くの名品を集めました。乾隆帝はさらにそれらを書道全集にして出版してもいます。このような皇帝による文化事業は、中国の伝統的な書道文化が長く保持された一因と言えるでしょう」に受験生の多くが注目したことがうかがえ、確かに、メモ1の「書道

文化へ積極的に関与した乾隆帝は」「中国の伝統文化を保護した」の部分は、この発言から正しいといえる。しかし、書道全集にして出版したのは、漢人ではなく満洲人の乾隆帝であるため、この発言から「漢人に対して自由な言論活動を認め」ていることは読み取れない。そこで、禁書や文字の獄など清の漢人に対する思想弾圧を想起し、**メモ1**を誤文と判断する必要があった。読み取った情報と習得した知識を結びつけて判断しなければいけない問題の一例である。帝国書院『新詳 世界史B』・『新詳 世界史探究』（以下、『世界史B』・『探究』）は、本文で文字の獄を太字で強調し、清の思想弾圧を説明しており（『世界史B』p.133・『探究』p.146）、教科書で強調された部分の重要性を意識した学習が必要である。

4 得点差がついた問題

■例題2　2024年度 共通テスト本試：第4問 問1 25

文章中の空欄 ア の人物の事績**あ・い**と、その人物が開催した公会議について述べた文**X**～**Z**との組合せとして正しいものを、後の①～⑥のうちから一つ選べ。 25

事績

あ　外敵の侵入に対応するため、軍管区制（テマ制）を導入した。

い　徴税強化のため、コロヌスの移動を禁止した。

公会議について述べた文

X　単性論が異端とされた。

Y　アリウス派が異端とされた。

Z　ネストリウス派が異端とされた。

①　**あ－X**　②　**あ－Y**　③　**あ－Z**
④　**い－X**　⑤　**い－Y**　⑥　**い－Z**

例題2は、河合塾のデータで現役生と高卒生、上位生と下位生との間で一番差がついていた問題で、会話文から ア がキリスト教を公認した皇帝、すなわちコンスタンティヌスと判断し、その人物が開催した公会議はニケーア公会議だと特定したうえで行う正誤判定である。現役生・下位層ともに②③の選択者が多く（下位層では、正解⑤の選択者よりも②③の選択者がそれぞれ2倍いた）、コンスタンティヌス帝の事績として「**あ**　軍管区制（テマ制）を導入した」を正しいと判断していた。また、「**い**　徴税強化のため、コロヌスの移動を禁止した」は細かめの情報とはいえ、軍管区制がビザンツ（東ローマ）帝国の制度だとわかれば消去法でも判断できる。ニケーア公会議について「**Z**　ネストリウス派が異端とされた」を選択した人が多かったこととあわせて、結局、**知識不足が正答率の低さに直結**した形である。ちなみに、コロヌスの移動の禁止については、『世界史B』・『探究』いずれにも言及があり（『世界史B』p.33・『探究』p.80）、教科書に基づく学習はやはり重要である。

5 現役生の弱点

例題1以外で現役生の正答率が低かった問題は、第3問 問4のアメリカ合衆国で起こったできごとについての整序問題、第4問 問5のポルトガル王室がコロンブスを支援しなかった理由についての仮説に関する問題である。前者では武器貸与法の時期が、後者ではコロンブス西航とトルデシリャス条約の前後関係と、スペイン王によるポルトガル併合の時期がわかっておらず、共通点は**事象の時期についての知識不足**である。

6 展望

2025年度から共通テストは『歴史総合，世界史探究』となる。現在は2022年秋に公表された試作問題でしか方向性は探れないが、世界史の問題形式はすでに共通テスト移行時に大きく変化しており、その方向性を引き継いで、より深化させているイメージである。つまり、多彩な資料を読み取り、習得した知識と組み合わせながら総合的に判断する問題が主流で、できごとの内容・特徴や因果関係・背景・影響などを問う問題が増加するイメージである。したがって、短文の中の用語入れかえレベルの正誤判定ではなく、問題の意図を理解し、そこに合う短文を選択する力が求められる。そのためには単語の暗記では不十分である。事象の時期を含めた正確な知識が結局必要であり、歴史的事象の背景や原因、結果や影響、縦や横のつながりなどに着目して、教科書を徹底的に利用した学習が望まれる。その際、豊富なコラムや地図・図版も活用するとよい。

最後に、「歴史総合」の日本史部分の攻略については、普段の「世界史探究」の学習を進める際に、18世紀以降については同時期の日本がどのような状態であったか、また世界の動きが日本にどのような影響を与えていたのかなどを確認する癖をつけるとよいだろう。